

夢の宅配便

1年学年主任

水野 喜代治

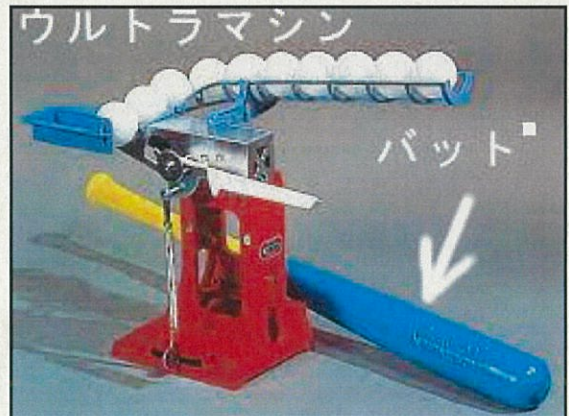
連載小説 第二編

「キヨさんの小さな小さなダイヤの指輪」

第2話…夕日に誓う

「お母ちゃん、買いたい物があるんだ。」と母に話しかけた。「何が欲しいの？」と母が訪ねた。「あのね、ウルトラマシンが欲しいんだよ。」ウルトラマシンとは、昭和43年に発売された、バッティングマシンのおもちゃである。当時、野球アニメの「巨人の星」が放映されて全国の子どもたちがテレビに釘付となった。主人公のピッチャーである星飛雄馬が投げる魔球は小学生を魅了した。人数が集まれば公園で野球をした。星飛雄馬になりきって、「大リーグボール1号」と叫んで魔球を投げては、ボールがスッぽ抜けて、公園のフェンスを超えて、隣接している民家のガラスを割って、こっぴどく叱られたりした。

プロ野球では王選手と長島選手が読売ジャイアンツで活躍し、小学生の大半はジャイアンツの帽子をかぶっていた。そんな野球ブームの中、バッティングマシンのおもちゃが発売されたのだ。テレビCMで繰り返し、宣伝された。棒状のアームが回転して、ピンポン玉に似た白い玉を飛ばしてくる。それをセルロイドのバッドで打つのである。このウルトラマシンを杉田先輩が買った。みんなで集まって、かわりばんこに、ウルトラマシンが繰り返してくるボールを打った。



玉がピンポン玉のような軽いボールなので、凄く変化してなかなか打てない。読売ジャイアンツの王選手のように一本足打法のマネをして打ち返したりした。それぞれがプロ野球の選手になりきって楽しんだ。私は、このウルトラマシンのとりこになって、欲しくて欲しくてしょうがない気持ちになった。ただ、このおもちゃは、ボールの付属品も買うと2000円ぐらいした。当時としては、とても高いものだった。キヨさんの一ヶ月の小遣いが200円だったので、とても手が届く価格ではなかった。

「ウルトラマシンがほしいのね。」母が少し笑いながら言った。「いくらするの?」「約2000円だよ。」「高いね、すぐには買ってあげられないよ。」と母が下を向いて言った。

「分かっているよ。大丈夫……。ただ言ってみただけ!」そう母に言って、外に飛び出した。外に出るとなんだか悲しくなって涙が浮かんできた。「どうして、お母ちゃんが買えないこと分かっているのに、おねだりしたのか?」自分が嫌になった。箱根山が夕焼けできれいに茜色に染まっていた。夕焼けを見ながら、二度とおねだりはしなろうと誓った。「お母ちゃんが可愛そうだから。」

庭を竹^{たけぼうき}箒ではく音が聞こえてきたので、振り返ると母が竹箒で掃除していた。「お母ちゃん、急に庭を掃き出してどうしたの？いつもは朝、掃いてるのに。」と不思議に思って聞いた。「喜代治こそ、急に庭に飛び出してどうしたんだ。びっくりしたよ。」と母が心配そうに聞いた。「夕焼けを見たかったんだよ。明日晴れるかなと思って。みんなで野球やる予定だから。」と涙を拭いて答えた。「そうなんだね。明日は晴れるよ。お母ちゃんは、明日、職場の人が恵子お婆さんのところに梨の予約注文をしに来るから、掃除してるんだよ。明日の朝は忙しいからね。」と箒を動かしながら答えた。母は、庭をいつもきれいにしていた。掃き終わると、箒の跡がまるで波紋のように描かれた。京都のお寺の庭のように見えて、とてもきれいになる。私も、母が掃いた後の庭が大好きだった。

「お母ちゃんね、今日、給食の大釜をかき混ぜる時に腰を痛めてね、掃く時痛いんだよ。夏休みに喜代治がお庭を掃いてくれるかな？」と母が言った。「まかしておいて、お母ちゃん掃いてあげるから、腰を大事にしてね」と私が答えると母は笑顔で「うれしいよ！助かるよ！一回掃いてくれたら50円のお駄賃^{だちん}を出してあげるよ。」「エッ！ほんと50円もいいの！」と私は驚いて目を丸くして母を見た。「本当だよ。掃除してくれたらお母ちゃん助かるよ。でもね、7時のラジオ体操の前に掃き終わらないと駄目だよ。朝早く起きて、体操の前に掃くこと！」と母は条件を述べた。「42日間、頑張れば、2000円以上貯まる。そうか、ウルトラマシンが買える。」私の頭の中に憧れのウルトラマシンが浮かび上がった。「お母ちゃん、絶対、42日間、掃除するよ。」と私は母にしがみついた。「頑張ринаさいね。喜代治は最後までやり遂げることが苦手だから、挑戦ですね。」と母がニコリした。「毎日、5時半におきて、掃除をして、7時のラジオ体操に遅れないように公民館に行くよ！」と私は眩しいオレンジ色の夕日を片目をつぶって見ながら母に決意を伝えた。

つづく